

日本マンガ的要素の現地化

～香港のマンガとポピュラーカルチャー

呉 偉明 (香港中文大学日本研究学系助教授) 訳/屋葺 素子

マンガの普及程度、経済的利益、対外輸出やその影響について論じるならば、日本はとうの昔からアメリカを超え、世界で一番のマンガ大国となっていた。1980年代より日本のマンガは香港や台湾、シンガポール、その他のアジアにおける若者に愛され続け、マンガは日本のポピュラーカルチャーの中でもっとも人気があり、なおかつもっとも深く影響を与えている文化であるといえる(注1)。近年、日本のテレビドラマやポピュラー音楽も人気が出始めてきたが、普及の程度や影響から見ると、やはりマンガとはまだ隔たりがある。本論文では、マンガの創作、マンガの消費文化、娯楽事業の3つの方向から日本のマンガが香港(訳注i)のマンガやポピュラーカルチャーに与えた影響について簡単に説明する。紙幅の関係上、本論では香港における日本のマンガ史や現状を系統立てて紹介することはできないが、その影響について集中的に論ずることとする(注2)。マンガと相関関係のあるアニメやテレビゲーム(三者を合わせてACG - Animation-Comic-Gameと呼ぶ)にも軽くではあるが触れる。

1. 日本マンガの香港マンガ創作に与える影響

香港はアジアにおいて自らのマンガの伝統を持つ数少ない場所のひとつである。そのカンフーマンガは一派をなし、日本マンガやアメリカコミックスとは異なった独特なスタイルを作り出し、各地にいる華人の若者の敬愛をうけた。比較的知られていないことは、香港マンガの発展が、戦後から現在まで一貫して日本マンガの影響をある程度受けていたことである。

まず、歴史を回顧して、香港を代表するマンガ家がいかに日本の影響を受けたかを見る(注3)。戦後初の香港出身のマンガ家は、1960年代になって正式に出現した。彼らは主に中国大陸のマンガの影響

1——日本マンガの香港・台湾・中国・韓国・東南アジアに対する影響に関しては、次を参照のこと。Ng Wai-ming, 2002, "The Impact of Japanese Comics and Animation in Asia," *Journal of Japanese Trade and Industry*, 22 (2): 30-33.

2——香港における日本マンガの歴史については、次を参照のこと。夏目房之介, 2001, 『マンガ世界戦略』, 小学館:93-114.ほかにも、趙永佳, 1988, 「日本漫画旋風襲港:記60至80年代的発展過程」, 『新晚報』6月5日.がある。

3——香港における戦後初、1950年から60年代のマンガの発展については、鄭家鎮, 1992, 『香港漫画春秋』, 三聯書局.を参照のこと。

を受けていた。当時、香港のマンガ家が日本のマンガに接触するルートには限りがあり、少数の翻訳された日本マンガを参考にするしかなかった。よって、日本のマンガによる影響は明らかではなく、比較的間接的なものであった。1960年代に香港で人気を得ていたマンガのなかで少なからず日本の要素を持っていたのは、許強の『神筆』と李慧珍の『十三点』（1966年開始）であった。『神筆』はSFミステリーである。そのなかでウルトラマンが主人公のひとりとなっていた。これは、1960年代終わりに香港でウルトラマンブームが起こったことによる。ウルトラマンは子どもがもっとも好きなキャラクターとなった。香港テレビ局ではウルトラマンの番組を放映し、香港の劇場の中にはウルトラマンの映画を上映したところもあった。当時、香港のマンガで販路を増やす目的でウルトラマンを登場人物として加えたものは少なくなかった。もうひとつの作品である『十三点』は香港で最初の少女マンガといえる。画法は多少なりとも日本の少女マンガの影響を受けている。特に、大きな目や長い足を用いることと、流行の服装に見られる。作者の李は、幼いころから日本の着せ替え人形で遊ぶことと日本の少女マンガを読むことを好んでいたといわれ、創作のインスピレーションも少なからずこういったものから生まれている。このほかに、東方庸のSF作品では日本のキャラクターを盗用した傾向がある。たとえば『科学小金剛』（1966）や『太空神童』（1966）は、明らかに手塚治虫の『鉄腕アトム』を種本にしていた（注4）。

1970年代、「香港の連環図（訳注ii）の父」と呼ばれる黄玉郎が香港マンガ界に登場した。彼は香港マンガの新しい路線を開拓することに成功し、日本やアメリカ、中国とも異なる香港の特色に富む作品を作った。黄の『小流氓』（1971-75）は、香港のカンフーマンガのさきがけを作った作品である（注5）。内容は、7人のカンフー男子が香港社会で低い階層にかかわって、強暴な者を負かす物語である。『小流氓』の出現は、ブルース・リー（李小龍）のカンフーブームの影響を受けている。黄玉郎はこの作品の創作時に、内容やスタイルの上で日本のマンガ家の望月三起也の作品（特に『ワイルド7（セブン）』）の影響を受けているらしい。『ワイルド7』は7人の特別な任務を課せられた警察の若者が暴虐を取り除き、善良な市民を安んじる物語である。『小流氓』ともっとも異なっているのは、『ワイルド7』の主役が現代的な武器と非伝統的な武術を用いて勝ちを収めているところである。望月三起也の写実的なスタイル、特に暴力画面の処理に対して『小流氓』ではある程度影響を受けたようだ。不思議なことに、主役の容貌ですら幾分か似ていた（注6）。このほかに、黄玉郎の同期の作品には、日本のマンガキャラクターを盗用したものがいくつかあった。そのなかで、『小魔神』（1969）と『超人之子』（1969）はもっとも明ら

——黄少儀・楊維邦編，1999，『香港漫画図鑑』，楽文書店：103。

——香港のカンフーマンガの形成や特色については、John Lent, 1999, "Local Comic Books and the Curse of Manga in Hong Kong, South Korea and Taiwan," *Asian Journal of Communication*, 9 (1) : 108-14. を参照のこと。

——黄少儀と楊維邦は、望月の『秘密探偵JA』が黄のキャラクターデザインに影響を与えていると指摘している。（黄少儀・楊維邦編，1999，『香港漫画図鑑』，楽文書店：21.）

かであった。前者は『鉄人28号』などの日本のロボットマンガやテレビシリーズの影響を受けている。後者は、1960年代末の香港のマンガにおけるウルトラマンの一連の盗作行為を引き継いでいる。当時は、まったく知的財産権を保障する法律がなかったため、こういった登場人物の盗用という状況は60年代、70年代に広く普及した。西洋の（たとえばバットマン）や香港の（たとえば老夫子）マンガキャラクターですら盗用の対象となった。1975年、香港政府は不良刊行物を一掃する法律を作ったため、『小流氓』は『龍虎門』（1975-現在）へと変身した。暴力的な要素を減らしたうえに、興味深い発展はバックグラウンドの国際化である。ヒーローが攻撃する対象は、香港の悪者から日本のヤクザへと変化した。これは、香港のカンフーマンガでのひとつの方程式となった。すなわち、正義をあらわす中国カンフーのヒーローと、邪悪をあらわす日本の武士との決戦である。『龍虎門』は70年代後半から80年代初めの香港でもっとも人気のあった香港のマンガであり、この状況は1983年に馬栄成の『中華英雄』が出版されるまで続いた。

馬栄成は、黄玉郎を引継ぎ、香港でもっとも人気があり、影響力のあるマンガ家となった。作品である『中華英雄』は1巻で20万冊の売上を記録した。馬栄成は日本のマンガを大変愛しており、創作の過程でも絶えず日本のマンガから学び続けていた。『中華英雄』各巻の最後1, 2ページを使って、馬が好んでいる日本のマンガ家の技術やその特徴を紹介している。馬がもっとも崇拜していたのは池上遼一であった。池上の絵の技巧は緻密で写実的であり、特にアジア人の顔やカンフー格闘の場面を描くのに長けていた。池上の『クライングフリーマン』や『男組』などの作品は『中華英雄』の創作に大きな啓発を与えた。馬自身も、池上から深く影響を受けていることを認めていて、特に初期の作品では、構図や影の書き方について池上から学んでいた。馬は自伝の中でも池上に対する敬慕を多くあらわしていた。馬は当時を思い出しながら次のように語る。「マンガ家になったばかりのとき、日本のマンガ家である池上遼一を崇拜していた。私の創作は彼からの影響を多く受けている。私の小さいころからの夢は、彼と握手することであり、みんなで心置きなくマンガについて語ることだった。だから、私は自分の連環図を毎号、日本の彼のところへ送っていたんだ〈注7〉。」このほかに馬に影響を与えていたのは、松森正だった。松森はカンフー格闘マンガに大変長けており、その格闘場面は真に迫るものである。松森の『拳神』などの作品は、空手の組み手や武器を用いての格闘について馬の手本となった〈注8〉。馬の初期の作品のテーマや背景の構図、人物の動作を描く際、少なからず松森正の啓発を受けている。ストーリーの構成や人物の性格を描く上では、馬はマンガの脚本家である小池一夫の影響をもっとも受けている。小池は長期にわたって池上遼一や松森正のマンガの脚本家でもあった。日本マンガでの脚本の扱い方について影響を受け、馬栄成は（そのシナリオライターの劉定堅とともに）最初からすでに『中華英雄』のストーリー展開や細部にいたるまで作り上げていた。これは絵を描きながらストーリーを作るという香港のマンガ家とはまっ

7 —— 馬栄成、1990、『馬栄成自伝：画出彩虹』、友禾製作事務所：39、95。

8 —— 上掲書：45。

たく異なることであった。ストーリーの進行をコントロールする、立ち回りに細かな感情や豊富な情緒を加える、毎回終盤に山場をもってくる、といった手法は小池を参考にしているようだ。香港のマンガ家では、黄玉郎のカンフーマンガが馬に啓蒙を及ぼした。先述した黄の方程式を引き継ぎ、ストーリーの主軸は中国武術の大家と日本の暴力団との敵対であった。

黄玉郎と馬榮成はともに、後に自らのマンガ出版会社をつくり、香港で二大マンガ陣営を作り上げた。香港のマンガ家の大部分は、黄の「玉皇朝」か、馬の「天下」の二大マンガ会社で作品を出版している(カンフーマンガが主)。黄と馬は近年、マンガ創作の上では第一線からすでに退いている。門下にいるマンガ家は彼ら二人の影響を多分に受けており、彼らを超えるまでには至っていない。

近年、もっとも注意に値するのは、香港のマンガ家でもこの二大集団の外にいる人たちである。中小規模のマンガ会社から出版をしている司徒劍橋と利志達が新人マンガ家の代表である。司徒の作品はもっとも日本風のものが多い。司徒はSFの特色のある格闘マンガを描くことに長けている。彼がもっとも崇拝しているのは、日本のSFアニメの大家である士郎正宗と安彦良和である。彼はこれまでの作品をこの二人の巨匠に送り、巨匠から何度も意見を受け取っている。よって、司徒は自らを彼らの「在家の弟子」と言い表している。日本のSF作品の影響を受け、司徒がデザインするキャラクターは比較的冷酷で、人間関係も疎遠である。司徒は次のように述べる。「私が描くのはSF作品なので、愛情に偏ることはできない。しかし、もしかすると、日本アニメ『機動戦士ガンダム』の影響を非常に受けていて、愛情の部分は婉曲的な方法で描いているといえるかもしれない(注9)。」司徒の初期作品である『賭聖伝奇』(1991)は、人物設定や考えに『ドラゴンボール』や『ウルトラマン』の影響を見ることができる。たとえば、スーパーサイヤ人やウルトラマンが変身するといった「必殺技」に類似するものがある。代表作である『超神Z』(1993)や『拳皇Z』(2000、SNKのライセンスを獲得)のインスピレーションは、それぞれ『ストリートファイター』や『ザ・キング・オブ・ファイター』といったテレビゲームから来ている(注10)。このほか、『六道天書』(1998、劉定堅との共著)や『八仙道』(2001)は『機動戦士ガンダム』や安彦良和の『アリオン』の影響がみえる。有名な日本のアニメとテレビゲームのスタイルやキャラクターを取り入れるという方法は今でも消えていない。事実、近年『ストリートファイター』や『ザ・キング・オブ・ファイター』を盗作した香港のマンガだけでも10作品以上存在する。

利志達は、近年もっとも創意的なマンガ家であり、その画風は独特で、大友克洋や望月峰太郎、丸尾末広の影響を多少なりとも受けている。テーマや表現スタイルは多元化していて、なかには、村上春樹の小説を材料としている作品もある(注11)。ストーリーを練る上で、慣例や常識を破ることを好み、常に人

——謝聯達, 2002, 「徘徊現実與科幻之間: 司徒劍橋自強信念: 「盡人事聽天命」, 2002, 『Action』 創刊号: 56.

——大アジア虚栄圏同盟編, 1996, 『亜細亞通俗文化大全』, スリーエーネットワーク: 253-4.

——上掲書: 254-5.

が考えもつかないような変化がある。こういった面は望月峰太郎と似ている。

現在、香港でもっとも人気のあるマンガ家の陳某は、日本マンガを基礎に個人の特色を打ち立てた作品を描いている。彼がもっとも崇拝しているのは池上遼一と寺沢武一のマンガと、黒澤明の武士映画である。名著の『火鳳燎原』は日本風のACG要素を包含している〈注12〉。

2. 日本マンガの香港マンガ消費文化に対する影響

香港の出版状況からいえば、日本マンガと香港のマンガは均衡している。1992年より香港の会社である文化伝信が日本から版權を購入して日本マンガの香港中国語版が出版されるようになってから、10社近い香港の出版社が日本マンガの香港版を出版している。なかでも文化伝信と天下、玉皇朝の「ビッグ3」が主力となり、合計で数百種類の日本マンガが出版されている。現在もっとも受け入れられている日本マンガの単行本は5万冊前後売り上げていて（以前、『ドラゴンボール』や『スラムダンク』は毎巻15万冊を超える売上だった）、売上がもっともよい香港版の日本マンガ雑誌『EX-am』（文化伝信）は毎号約4万冊を売り上げている（全盛期は20万冊を超えていた）〈注13〉。

日本マンガは香港マンガの消費文化にとっても大きな影響を与えている。まずそのひとつに、香港マンガの出版スタイルへの衝撃がある。香港マンガのスタイルはアメリカに近く、一般的にA4サイズの紙にカラー印刷を行った、一冊が30～40ページくらいの薄い本で、週刊形式として現れた。しかし、日本マンガの中国語版は日本の単行本のスタイルに沿っている。B5の紙にモノクロ印刷を行った約200ページの本で、平均1～2ヶ月に一度の出版というスタイルである。近年、香港のマンガは日本の単行本スタイルでの出版を採用するようになり、とくに珍藏版や復刻版に多い。これは、日本のスタイルのほうが体積が小さくて紙面も多いうえに、携帯や保存が容易であるからである〈注14〉。

貸しマンガ店の普及は、日本マンガブームを引き起こした要因にもなっている。香港の貸しマンガの歴史は1950年代までさかのぼることができるが、本当に普及したのは1980年代以後のことであった。特に1980年代後半より、日本マンガの流行にともなって、日本マンガを主に扱う貸しマンガ店は雨後の筍のように出現した。現在、市場にはこういった店が200軒近くあり、その一部はマンガ喫茶である。常連客は20～30代の男性が主である。マンガ喫茶やネットカフェの流行につれて、最近ではマンガネットカフェが

12———呉偉明, 2005, 「與陳某談火鳳燎原的日本元素」, 『新少年』11月号, 東立出版社。

13———シンガポールと香港における日本マンガの出版の比較については、次を参照のこと。呉偉明, 2000, 「新加坡的日本漫画文化」, 『亞洲文化』24, 新加坡亞洲研究学会: 108-21.

14———「ビッグ3」以外に、東立と自由人（既に倒産）が主なる中型サイズのマンガ出版社として日本スタイルの単行本や雑誌を多く発行し、地元のマンガ業に衝撃を与えた。（劉定堅, 1993, 『連環圖大決戦』, 自由人出版集団: 193-5）

香港にも出現し、e世代の新たな消費スタイルになっている。

同人誌（アマチュアのマンガ創作）やコスプレ（costume play：アニメやマンガの人物に扮する行為）は日本から伝わってきたマンガ文化である。同人誌は1980年代にはすでに香港に現れていた。なかでも、1985年に出版を開始した同人誌のマンガ雑誌『漫画同盟』は重要である。この雑誌は、毎号10数作品の実験性のある短編を掲載していた。1990年代に文化堂が出版したマンガや、2004年に創刊した『Speed Up』という少女マンガ雑誌（火狗工房出版）も同人誌的な性質を多少持ち合わせていた。近年では、毎年定期的にいくつかの同人誌の活動が行われている。そのなかで、コミック・ワールド（日本のS.E株式会社と香港のTG坊などの組織が合併）は規模が大きく、もっとも頻繁に（年4回、2002年より年2回）行われている。2005年2月には第16回が行われた。このほか、年1回行われる漫人墟（マンガ市場：香港漫画協会主催）も同人誌の盛大な行事である。全体的に言えば、香港の日本マンガやアニメのサークル組織は多く、同人誌活動に参加するアマチュアマンガ家も増加の一途をたどっている。作品の多くはインターネット上に掲載しているなど、香港で同人誌作品を販売し収蔵する活動は、いまだに十分発達しているとはいえない。近年では、同人誌出身の新人プロマンガ家が現れている。たとえば、孫軍威、曾健游および童彦明は同人誌作品が文化伝信に発見されて招かれ、日本で訓練を受けている。

コスプレは、1993年のある文化展覧会で初めて現れた。「四百呎」という香港同人誌グループがブースを借りてメンバーのマンガを販売していたとき、そのメンバーが『銀河英雄伝説』のキャラクターに扮して人々の注目を浴びた。1997年に香港漫画協会が漫人墟（マンガ市場）を主催した後、香港の同人誌やコスプレの愛好者はこれをさらなる活動の機会ととらえ、漫人墟（マンガ市場）への参加人数は毎年上昇している。1999年からコスプレはますます人気となってメディアの注目を受けるようになり、同人誌とは分かれて独立した発展傾向をみせた。香港の各大学でもコスプレのイベントを行っている。現在毎年4～5つの大型コスプレイベントが行われ、コスプレの愛好者は数百人に達している。香港のコスプレはローカル化現象をみせていて、日本のマンガキャラクター以外に、日本のアイドルスターや映画・ドラマのキャラクター、香港のマンガキャラクターすらもコスプレの対象となっている（注15）。

3. 日本マンガの香港の娯楽事業に与える影響

日本マンガは、香港の消費文化や娯楽事業にきわめて大きな影響を及ぼしている。消費文化の面では、サンリオ（ハローキティなど）、San-X（たればんだなど）、任天堂（ポケモンなど）、バンダイ（デジモンやハイパーヨーヨーなど）などの日本アニメのキャラクター商品も香港でとても流行している。日本版以外に

——香港のコスプレに関する紹介については、次を参照のこと。Eddie Chan, 2001, 『J-point別冊：Cosplay Collection 秋の號』, J-Fan Ltd.

も、大量に地元版や海賊版が流通している。地元版とは、香港の会社が日本から著作権を購入し、日本のアニメキャラクターの商品への使用許可をもっていることをいう。月餅（訳注 iii）を例にとると、近年、月餅業者からハローキティ、セーラームーン、ちびまる子ちゃん、デジモンやポケモンの月餅を新たに発売されている。すなわち、中秋節に日本の雰囲気加えられているのである。日本アニメのキャラクター商品の成功は、香港の会社を刺激して、アニメキャラクター商品市場への加入を促した。「可愛天国」や「Codebar」といった香港の二大アニメキャラクター会社は、デザインや商業手法ともに日本化されている。「可愛天国」を例にすると、全てのキャラクターにはハナコやナナコなどの日本語の名前がつけられているのである。なかには、日本の神話の妖怪でもある「河童」までキャラクターとされている。

日本のマンガやアニメは、香港の映画やテレビドラマや音楽にも衝撃を与えている。映画でもっとも明らかな影響は、1990年代以降に多くの日本マンガが実写版として香港の映画になっていることである。たとえば、『頭文字（イニシャル）D』、『シティハンター』、『スラムダンク』、『孔雀王』、『力王』、『妖獣都市』、『同居時代』、『ドクターくまひげ』、『サインはV』、『クライングフリーマン』、『GTO』、『ブラックジャック』、『鉄拳』、『ストリートファイター』、『金田一少年の事件簿』、『殺し屋一』など数十点に及ぶ。たとえば、『シティハンター』『孔雀王』『頭文字（イニシャル）D』は正式に日本から著作権を購入している。これらでは日本の俳優やスタッフ、資金の参加があるだけでなく、香港と日本とで上映している。しかし、香港の市場をターゲットとしている製作では日本から著作権を獲得していないものも少なくない。なかには広東語タイトルを変えたものがある（たとえば、『GTO』は中国語訳では『麻辣教師』となるが、香港で作られた『麻辣教室』は『GTO』を模倣した作品である）。そのうえ、監督やシナリオライターはストーリーに手を加えて、登場人物を香港風の名前に変え、法律的な責任から逃れようとしている。このほかに多くの香港映画で日本のマンガの中国語版のタイトルを盗用したりほのめかしたりしているが、内容は日本の原著と全く関係がない。『タッチ』、『僕といっしょ』、『愛と誠』、『破壊王ノリタカ』、『超時空要塞マクロス』、『行け!稲中卓球部』などは香港映画のタイトルにされている（たとえば、『超時空要塞』（『超時空要塞』から）、『香港愛的故事』（『東京ラブストーリー』から）、『初恋無限Touch』（『タッチ』から）。『僕といっしょ（廃柴同盟）』、『破壊王ノリタカ（破壊王）』、『愛と誠』は直すことなく使用されている）。日本マンガは香港映画の内容や表現スタイルにも影響を与えている。チャウ・シンチー（周星馳）のコメディは非常にマンガ風である（たとえば、驚いたときに大の字になって倒れる、興奮したときに鼻血を出すなど）（注16）。チャウは『少林サッカー』（2002年、6000万香港ドルの売上。観客数は香港史上最多）は『キャプテン翼』の啓発を受けていることを認めている。当初タイトルを『少林サッカー翼（少林足球小将）』にしようとしていたほどだった（注17）。ほかにも、近年香港では料理の対戦をテーマにし

16———欧陽傲雪，1999，「再談香港電影」，『西湖評論』67。

17———びあ特別編集，2002，『少林サッカー公式読本』，びあ株式会社：110-112、128。

た映画が多く出ている。これらは明らかに『ミスター味っ子』、『将太の寿司』、『おいしい関係』、『中華一番!』などの日本マンガの影響を受けている〈注18〉。

日本のACGは香港のアニメ制作やCG（コンピューターグラフィック）が映画に利用されることへも刺激を与えている。ツイ・ハーク（徐克）が指揮を執ったアニメ映画『小倩』（1997年）は、香港人が日本人の力を借りて試験的に製作した香港アニメの例である。この映画は、ディズニーや宮崎駿と肩を並べるような美しい香港アニメ映画であると宣伝されたが、厳格に言えば香港と日本の合作作品であった。香港側が出資、指揮、アフレコ、脚本、構想に責任を負っているが、具体的な製作、たとえば原画、着色、カット割り、3Dデジタル効果などは主に日本の会社に委託していた。2002年前半、日本のBSフジにて中日合作で製作された金庸作の『神鵬俠侶 コンドルヒーロー』というアニメシリーズが放映された（全26回）。これは日本アニメーション株式会社と香港の翡翠動画が合作し、香港と日本の合作テレビアニメのさきがけを作った〈注19〉。

『愛と誠』や『め組の大吾』などは香港でテレビドラマ化もしている。タイトルは違うが（『愛と誠』は『香城浪子』（1982年、無線テレビ）、『め組の大吾』は『烈火雄心』（1999年、無線テレビ））、知っている人が見れば日本マンガの香港テレビドラマ版であることを判別できる。『楼下伊人』（1990年、亞州テレビ）も『めぞん一刻』の雰囲気が見える。2001年、台湾の中華テレビで日本の少女漫画『花より男子』をドラマ化したものが『流星花園』であり、台湾で人気を得たテレビドラマとなった。2002年に香港の無線テレビが日本から著作権を取得し、香港版の『流星花園』を撮ることも可能である。最近の香港では、日本のアニメ作品を香港で映画やドラマにするときは、日本から正式に著作権を購入する方向に発展している。

日本アニメは香港のポピュラー音楽をも豊富にしている。香港の芸能人は日本アニメの主題歌を広東語バージョンで歌うことを好んでいた。『ドラえもん』、『ドクターランプ』、『新竹取物語1000年女王』、『アルプスの少女ハイジ』、『ゲゲゲの鬼太郎』、『忍者ハットリくん』、『一休さん』、『アンパンマン』、『ちびまる子ちゃん』、『カードキャプターさくら』、『デジモン』、『爆球連発!スーパービーダマン』、『爆天シュート・ベイブレード』、『ハイパーヨーヨー』の広東語バージョンの主題歌は流行した。近年、『ドラえもん』、『ポケットモンスター』、『デジモン・アドベンチャー』などの日本アニメ映画は、香港で上映されるときは香港の有名な歌手が広東語バージョンの主題歌を歌っている。

——著者による『食神』の李力持監督へのインタビューより（2005年11月15日）。

——この資料は、2002年2月15日に筆者が東京アニメーションフェア21に参加したときに、日本アニメーション株式会社取締役である黒須正雄氏との会談中に知りえた。このアニメは台湾や香港で人気を得ている。（呉偉明、2005、「日本における金庸小説の受容」、『日中社会学研究』12, 27-43.）

4. 結び

日本のマンガが香港において多くの面で相当な影響を与えていることは紛れもない事実である。日本のマンガは香港のマンガやポピュラーカルチャーを充実させている。しかし、香港のマンガ家や芸能人の多くが盲目的に日本を盗用しているわけではなく、選択して手を加えたり使用したりしている。事実、香港のマンガ、映画、テレビドラマ、音楽はどれも独特であり、これは反対に日本の同業者の参考になるかもしれない。ブルース・リー（李小龍）やジャッキー・チェン（成龍）のカンフー映画や、金庸の侠客小説は日本で人気がある。香港のアニメ会社であるメンフォード・エレクトリック・アートは、日本のスクエア社の『ファイナルファンタジーⅧ』のアニメ映像製作に参加した。香港マンガも日本人の注目をえるようになってきたのである。たとえば、李志清が描く中国の水彩画風のマンガ（『射鵬英雄伝』や『三国志』（日本のマンガ脚本家の寺島優との合作）など）や、利志達の計り知れない変化をする特殊な画風や、陳某の中国三国史マンガは日本人も認めており、彼らの作品は日本での出版にも招かれている（注20）。文化がグローバル化する今日、香港と日本のマンガ界やポピュラーカルチャーが合作によって相互に刺激をしあう機会を多く設けるようになるだろう。これは、創作意識や手法上の相互刺激だけでなく、商機をつくり、市場や創意が近年下り坂である香港と日本のマンガ界に新たな原動力をもたらすだろう。

「本研究獲香港特區政府研究資助局資助完成（CUHK4680/05H）」

訳注

訳注 i 香港の基礎データは以下のとおり（外務省ホームページより）

面積：1,098 平方キロメートル（東京都の約半分）

人口：681 万人（2003 年）

人種：漢民族（約 98%）

言語：広東語、英語、中国語（北京語）ほか

訳注 ii 「連環図」とは、（子供向けの）小型の連続絵物語で、コミックブックの一種である（『中日辞典』第1版,1992,小学館）。

訳注 iii 「月餅」とは、中秋節（旧暦8月15日）に食べ、または明月に供えるまるい焼き菓子である（『中日辞典』第1版,1992,小学館）。

20——李自清は、最初に金庸小説の日本版に挿絵を描いたことで日本人の注意を引き、日本で発行される『射鵬英雄伝』や『三国志』に招かれた。このほか、彼は日本の小説の表紙や挿絵を描いている。